# サーカスにて

カフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サーカスにて

【Ｎコード】
Ｎ２６９２Ｋ

【作者名】
カフ

【あらすじ】
サーカスを見に来た僕はサーカス小屋でみてはいけないものを見る。

夢か、私のかってな空想か、はたまた本当にあったのかすら定かではないほどあいまいな記憶。

私は家族とサーカスを見に来ていた。サーカスのテントの周りには頬を赤くし開演をいまかいまかと興奮した面持ちで待つ人々。

母も父も私もそういった興奮のうずへと引き込まれていた。しかし、私はサーカスのテントの横の建物が目に入った。それは観客を幻想世界へといざなう七色に塗られたテントとは対照的に地味な木で出きた小屋だった。それはこの場にはあまりにも不釣り合いであまりにも現実的であった。

私はまるでこの世の秘密を見たような気がしてその小屋へと向かった。母も父も催眠術にかかったかのようにテントから目を離さずに私が離れていったのにも気づかなかった。

小屋の中には二人の男がいた。1人は派手なスーツを着た小太りの男だったおそらく団長なのだろう。もう1人の男は上半身体でロープで両手を縛られ天上からつるされていた。男の体には生々しい傷がいっぱいあった。

「ねぇ、何してるの」私は好奇心からそう聞いた。

「おやおや、ここは立ち入り禁止だよ」スーツの男はで丁寧な口調で答えた。顔には偽りであろう笑顔が張り付いている。

「ねぇ、何してるの。そこのおじさん怪我してるよ」私は再度聞いた。吊るされた男は私の登場に顔色一つ変えず虚ろな目をしている。

「坊や、この人はこういう役割なんだ。サーカスのみんながイライラした時にこの人を殴るんだ。そうしたら、だれも争うことなく不満は解消されるだろ？」

「でも、この人がかわいそうだよ」そう言うと。スーツの男の笑顔はボロボロとはがれ、その下から怪物が出てきた。口は狼のよう

に大きく、目は鷲のようにするどい。耳はナイフのように尖っていた。

「かわいそう？よくそんなことが言えるな。いいかよく聞け、小僧。弱い奴は強い奴に虐げられる。これはな世の中では当たり前のことなんだ。学校のイカレ教師が言う道徳なんてものが世界で通用すると思うなよ」怪物は涎を垂らしながらまくし立てた。

「で、でもそんなの」私はすぐに逃げ出したかった。しかし私の心の中の良心が私の足の裏と地面をべったりとくっつけていた。

「だいたいなぁ、お前は私１人が悪いみたいに言うがな、お前らの親や今日集まっている客、全員、俺と同類なんだよ。世界にはこの男が受ける不条理以上の不条理が山ほどある。それを大人たちはみんな知っている。でもな、知っててもも誰も助けないんだよ。どうしてか？助けたってなんの得にもなんねぇからなんだよ。わかったかクソ餓鬼。さっさと消えろ。食っちまうぞ」怪物はその大きな口を開けた。

私と地面をくっつけていた良心は簡単にはがれ、私は一目散に逃げ出した。その後のことははっきり覚えていない、しかしはっきりいえることがある。

それは今日もどこかでサーカスは開かれ、知らないふりを決め込む観客は浮かれ騒ぎ、そのかげで怪物に吊るされた男はなぶられ続けるのだろう。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2692k/

サーカスにて

2010年12月30日01時33分発行